



Tokyo Gakugei University Repository  
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ともに生きる子どもたち：「ベンチ」(リヒター作)を読む
Author(s)	野中, 三恵子
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 28: 37-48
Issue Date	2001-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/7019">http://hdl.handle.net/2309/7019</a>
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

# ともに生きる子どもたち

－「ベンチ」（リヒター作）を読む－

東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校

野中 三恵子

## 目 次

1. 実践研究のねらい	38
2. 実践の内容	38
2. 1 教材について	38
2. 2 単元の構想	39
2. 2. 1 単元名	39
2. 2. 2 単元設定の理由とこの単元に期待すること	39
2. 2. 3 単元のねらい	39
2. 2. 4 単元計画と学習の経過	39
2. 2. 5 単元の評価	39
2. 2. 6 公開研究授業（本時）の展開	41
2. 3 生徒の読み	43
2. 4 実践の考察	45
3. 「ベンチ」に関する参考資料・文献	46

# ともに生きる子どもたち

—「ベンチ」（リヒター作）を読む—

東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校

野中 三恵子

## 1. 実践研究のねらい

これは中学1年生の1学期に行った文学教材「ベンチ」（リヒター作 上田真而子訳 中学国語1 教育出版所収）の「読むこと」の学習についての報告である。中学1年生がこの教材をどのような読んだかということをもためたものである。と同時に、文学教育の可能性も明らかにしたいと考えている。

なおこの実践は、平成12年6月23日に本校の研究発表会（テーマ「新しい中学校像の創造」）で公開授業として行ったものである。（指導助言者 田近洵一先生 早稲田大学教授・司会 鈴木仁也先生 東京学芸大学教育学部附属高等学校教諭）

## 2. 実践の内容

### 2. 1. 教材について

「ベンチ」は『あそこはフリードリヒがいた』（リヒター作・上田真而子訳「岩波少年文庫」）の中の作品である。1940年のドイツが舞台で、ユダヤ人の少年「フリードリヒ」が、ユダヤ人ではない少女「ヘルガ」に恋心を抱くが、ナチス政権下における「ユダヤ人弾圧」という過酷な現実のもとに、その恋もあきらめなくてはならないという話である。

<資料1>は「ベンチ」一読後の「初発の感想」である。その表からも分かるように、一度の読みで、ある程度の内容について読めていることが分かる。その一方で、生徒は「ベンチとフリードリヒ」や「ヘルガの行動」そして「ユダヤ人差別に対するなぜ」にこだわっていることも分かる。人物を読むということは、登場人物一人ひとりの行動や心理を読むということになり、状況を読むと言うことは、時代背景を理解することにつながる。

初発の感想では「ユダヤ人差別」に対する「なぜ」という疑問が多かった。「なぜユダヤ民族が差別されなくてはならないのか。」「収容所とはどんなところなのか。」「フリードリヒとヘルガを取り巻く状況がある程度分からないと「ベンチ」という作品を深く読むことは難しい。そしてそこから、「ベンチ」からだけでは、分からない情報を得ようという活動が生まれた。

ヘルガに憧れを抱いたフリードリヒの気持ちを生徒たちは自分の体験と重ねて想像することができる。二人がデートをしている情景を「いい感じ」と表現し、そんな二人を「うらやましい」という感想さえ出た。教材文を丁寧に読むことによって、二人の気持ちを想像したり、二人に対して感想を持ったりすることができた。この行為（学習）こそが、文学を学習する上で大切なことであると私は考えている。

しかし、「ベンチ」の出現で、それまでの二人の「いい感じ」は吹き飛んでしまう。公園のベンチに座るといふ何でもない行為の前に、フリードリヒは悩むのである。自分がユダヤ人であることを知られるとヘルガを失ってしまうと考えたからだ。しかし、緑のベンチに座ったところを人に見られたらどういう結果が待っているのか。

またその後のヘルガのとった行動について、生徒は一人ひとりが感想を持つのがあった。そして、そこにつきまとう「ユダヤ人差別へのなぜ」「収容所とはなんであるのか」という疑問。

短時間ではすべての疑問や歴史を理解するのは難しいが、フリードリヒの苦しみ、ヘルガの強さ、優しさ、そして時代背景を想像しようとする生徒の姿を目の前にするとき、調べ学習など教材を「読む」ための活動や新たな読書活動などの、文学教育の可能性を信じることができる。

## 2. 2. 単元の構想

### 2. 2. 1 単元名 ともに生きる子どもたちー「ベンチ」(リヒター作)を読むー

### 2. 2. 2 単元設定の理由とこの単元に期待すること

中学1年生の生徒にとって文学的な文章を「読むこと」の学習は、「オツベルと象」(宮沢賢治作)に続き、2作品目である。すでに生徒は「読むこと」の学習として、叙述に即して、登場人物の心情を想像したり、出来事や状況を理解したりすることを学習してきた。この学習でも、叙述に即して登場人物の心情に迫り、自分たちと同世代の少年、少女について読むことを大きな目標とした。

「ベンチ」は教科書の中では「発展」教材として収められているが、本単元では「ベンチ」の作品を読み深めるために、教師の説明だけではなく、必要な事柄を調べて物語の状況について理解することもめあてとしている。そのため、通常より時間を多くとって指導計画を考えている。

「状況」を読むことで、ヘルガのために恋愛感情を抑えなければならなかったフリードリヒの苦しさ、無念さを想像することができる。

また教材文だけでは、「きみ」(フリードリヒのドイツ人の幼なじみで、この物語の語り手)の存在が分かりにくいなど、理解しがたい所がある。そのため、「ベンチ」の出典である「あそこはフリードリヒがいた」の一部を紹介し、フリードリヒや「きみ」についての理解の助けになるように考えた。

この学習をきっかけに、今後『あそこはフリードリヒがいた』や『アンネの日記』などを読む姿や状況を理解するための活動する姿を期待したい。

### 2. 2. 3 単元のねらい

- ①ナチス政権下のドイツに生きるドイツやユダヤ民族の少年少女達の姿を読み取ることができる。
- ②登場人物の言動を通して、「フリードリヒ」や「ヘルガ」の心の動きを捉えることができる。
- ③作品世界を理解するために必要な情報を集めたり、時代背景や状況について理解したりすることができる。
- ④主人公の生き方に感想を持つことができる。

### 2. 2. 4 単元計画と学習の経過 全7時間

(1) 全文を読んで初発の感想を書く。(1時間)

(2) 観点別<●人物○事件(出来事)◎状況(様子)>に分けた初発の感想のプリント<資料1>を読んで、学習課題<資料2>をつくる。(1時間)

(3) フリードリヒとヘルガの心情について理解を深める。(4時間)

(②の「調べ学習」は必要に応じて時間をとる。)

①読みの課題<資料2>を追究する。(本時は4分の1)

- ・ベンチを前にしたフリードリヒの気持ちの変化について。
- ・緑のベンチに座れなかったフリードリヒに対するヘルガの気持ちについて。

②読みの課題を追究するために参考資料を調べる。

<資料3>「『ベンチ』(リヒター作)を読むための資料」<資料4>「ナチの時代の子どもたち」

本校の司書教諭(村上恭子氏)の協力により作成した資料。本校の図書館にある文献からリストを作った。

公開研究授業で配った資料 <資料5><資料6>「ナチス・ドイツ強制収容所の主要所在地」

(『母と子でみる2 アウシュビッツ』早乙女勝元編 草の根出版会 1987年所収)

<資料7>「消されていった子どもたち」『アウシュビッツへの手紙』

(平和博物館を創る会編 平和のアトリエ刊 1994年所収)

<資料8>「ユダヤ人に対する迫害年譜」(『あそこはフリードリヒがいた』リヒター作 岩波少年文庫 1977年所収)

③フリードリヒとヘルガに対する感想を書く。

(4) 『あそこはフリードリヒがいた』の中から二つの話を読む。(1時間)

「ボール(1933年)」「先生(1943年)」

2. 2. 5. 単元の評価

- ① 登場人物の心情を理解し、自分の考えを持つことができたか。
- ② 登場人物の置かれている状況や出来事の経過を、理解することができたか。
- ③ 友達の発言を聞いて自分の考えと比較したり、自分の考えを文章に書いたりすることができる。

<資料1>

1年A組「ベンチ」第1回(6/19日) 初発の感想より

6月20日(火)

感想の観点 ●人物 ○事件(出陣) ◎状況(様子)	7●◎ドイツ人とユダヤ人、ヘルガとフリードリヒとの関係	14●ヘルガはユダヤ人弾圧に反対なのは◎キーワードは差別	21○ヘルガはなぜフと一緒にいるのか ◎差別はよくない、なぜユダヤ人への差別があるのか	28●ヘルガの振る舞い ◎ユダヤ人弾圧はひどい話	A組 蕃 ( )
1◎ナチスドイツのユダヤ人差別を世に訴えている	8●ヘルガの言動に嬉しくまた、困るフリードリヒの気持ち	15●「きみ」とフはユダヤ人だと思ふヘルガの気持ち	22◎黒人への差別とユダヤ人への差別がどう違うかもっと知りたい	29 欠席	35●ヘルガの気持ち ◎ユダヤ人がなぜ差別をされるのか
2○ヘルガはなぜ黄色いベンチに座ったのか◎ユダヤ人への差別	9●フリードリヒはユダヤ人だろう。○リングも当時は貴重なものだったので	16●「きみ」もフもユダヤ人だと思ふ。ヘルガは差別をいけないと思っている◎差別はいけない	23●フは自分がユダヤ人であることを知られたくない。ヘルガは差別に反発を持っている	30●ヘルガは差別をしない人◎なぜドイツはユダヤ人を差別したのか	36●ヘルガはフリードリヒを差別していない
3フリードリヒがヘルガの誘いに喜び迷う気持ち◎ユダヤ弾圧	10●フが差別をされてかわいそう。ヘルガは心が広い◎差別のない世界を作れないか	17●「きみ」とフはユダヤ人だと思ふ。ヘルガの気持ち◎ユダヤ人用ベンチに驚いた	24●ヘルガはなぜ黄色いベンチに座ったのか。「きみ」はユダヤ人ではないのでは?	31●ヘルガはいい人だと思ふ。◎ユダヤ人を差別するのはやめた方がいい	37●ヘルガはユダヤ人をどう思っていたかヘルガは独・フと「きみ」はユダヤ人◎ドイツのユダヤ人への差別・物々交換
4●ヘルガは優しいまるヘルガがフと一緒にいたわけは?	11○ヘルガが黄色いベンチに座ったのはすごい◎フリードリヒを通して差別の悲しさを知った	18○なぜフがヘルガの誘いに答えなかったのか?◎外出禁止時間ユダヤ人といること	25●ヘルガはフをユダヤ人だとなぜわかったか?◎ヘルガが黄色いベンチに座った理由	32●ヘルガはフを差別していない。フは嬉しい◎ユダヤ人弾圧の為会えない二人	38●ヘルガは何人か?フはヘルガを好きだが弾圧のために離れた
5●ヘルガはフリードリヒを差別しない、勇気があり、エライ	12●ヘルガはドイツ人ではないか○ベンチに座るヘルガは勇気がある◎ユダヤ人への差別は戦争のせい	19○フリードリヒはなぜヘルガの誘いに返事をしなかったのか	26●ヘルガの気持ち◎お父さんの言葉◎「ぼく」もユダヤ人だろう	33◎太平洋戦争の頃ユダヤ人はドイツ人からひどい差別を受け、がんばってきた	39○フがヘルガと仲良くなった◎ユダヤ人への差別
6フはヘルガをあきらめている。父はフのことを心配している。◎「きみ」の視点が気になる	13 欠席	20●ヘルガは何人か?○ヘルガはいつフをユダヤ人だと分かったのか・フはヘルガが好きだったか?	27●ヘルガはユダヤ人と歩いたりして差別に反対していると思ふ	34◎ユダヤ人はどうして差別されたのか。私とその立場だったらとまどう	40○フがヘルガを追いかけたのはリングをほしかったこともある

## 2. 2. 6. 公開研究授業の展開

### (1) 本時のねらい

- ①この物語の中で描かれている状況や出来事が分かる。
- ②ベンチの前で座るのをためらうフリードリヒとベンチに座っているときのフリードリヒの気持ちを想像することができる。
- ③友達の発言を聞いて自分の考えと比較したり、自分の考えを文章に書いたりすることができる。

### (2) 本時の展開

過程	学習内容と学習課程	指導上の留意点
導入	1 友達の感想や疑問などを知り、今日の学習のねらいと方法を確かめる。	○座席表に書いたプリント<資料2>を作成し、配る。
展開	2 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">                     ベンチに座るのをためらったフリードリヒの心情を想像する。                 </div> ① 122頁上段2行目から下段5行目までを、フリードリヒとヘルガの様子分かる表現に線を引きながら読む。 数人の生徒が音読する。  ② 本時の場面までの状況と出来事の経過を叙述に沿って確認する。  ③ フリードリヒとヘルガの心情について想像したことを話し合う。  ④ 「収容所」「ユダヤ人迫害の年表」などの資料を読む。	○特に着目させたい表現 ・ベンチの前に立ったまま、足を踏みかえたりして、もじもじしていた。 ・そわそわ辺りを見回していたんだ。 ・もぞもぞしてたんだな。 ・うわのそらだったから。 ・お礼を言うのさえ忘れていた。  ○生徒の発言を関連づけながら板書する。  ○読みを深めるために、「収容所」のことが書いてある本や「ユダヤ人迫害の年表」などの資料を配る。この資料は、読みの理解を深めるためのきっかけである。どのような資料が他にあるか、またどこにあるか、調べ方などを簡単に説明する。  ○資料を読んで、今までの考えと変わったことや更に深まったこと、もっと知りたいことなどがあれば書くように伝える。
結び	3 本時の学習感想を書いて発表する。	

### (3) 本時の評価

- ①この物語の中で描かれている状況や出来事が分かったか。
- ②ベンチの前で座るのをためらうフリードリヒとベンチに座っているときのフリードリヒの気持ちを想像することができたか。
- ③友達の発言を聞いて自分の考えと比較したり、自分の考えを文章に書いたりすることができたか。

感想文 ・知りたいこと ・疑問 ・登場人物について の感想など	7) 知らなければ ならないことはユ ダヤ人に対する差 別。 「フ」とヘルガの 行動にはとても意 味がある。	14) なぜユダ ヤ人を差別する のか、歴史を調 べていきたいヘ ルガのような人 もいるのだから 反対の人もいた のではないか。	21) 収容所の 中のこと、町中 での差別、「ぼ く」、「フ」の と、ダビデの星 をもっと知りた い。	28) ヘルガが 黄色のベンチに座ったのは「ユ ダヤ人弾圧」への反対か、それ ほど「フ」が好きだったのか。 その後の二人と 纏されすぎているユダヤ人の生 活を知りたい。	A組 番 ( )
1) 当時の独をもっとよく知るために調べてフリードリヒやヘルガの立場や心境を理解したい。	8) 「フ」をユダヤ人だと分かったときのヘルガの気持ち。 知られたときの「フ」の気持ち。 収容所について。	15) 「フ」のお父さんの言葉を考えたい。黄色いベンチに座ったヘルガを立たせ、自分は座らなかった黜。	22) ヘルガは収容所が怖くないのか。「フ」はコンプレックスがあるのか。「きみ」は独人ではないのか。	29) ユダヤ人への差別はなぜ起きたのか。その実態は。独はどこで戦争していたのか。二人の気持ちは。	35) ユダヤ人弾圧の本当の原因は何か。ヘルガが黄色いベンチに座ろうと思った理由。「フ」の父親の気持ち
2) もっとユダヤ人への弾圧のことや収容所のことを知れば「ベンチ」の見方が分かるはず。	9) ユダヤ人が差別されたのか知りたい。「フ」は差別をなくしたかったんだらう。 ヒトラーのことも調べたい。	16) ユダヤ人ではないヘルガがユダヤ人用のベンチに座ったらやっぱり収容所行きになるのか。りんごの種類は何か。	23) ユダヤ人を差別する本当の理由を知りたい。ユダヤ人はどうやって生活していたのか。一緒に入ると二人はつれて行かれるのか。ダビデの星は何か。	30) 「フ」がユダヤ人と呼ばれたときの二人の気持ちを知りたい。ヘルガは、「フ」と仲良くなりたいからではないか。	36) フリードリヒはヘルガを思って森に行かなかったのではないか。ヒトラーのことをもっと知りたい。
3) フリードリヒがヘルガのりんごを狙っていたが、出かける約束までするところを考えてみたい。	10) フリードリヒに対するヘルガの気持ちを知りたい。ユダヤ人弾圧の実態を詳しく知りたい。	17) ヘルガの言動からすると、ヘルガはたぶんドイツ人だらう。ヘルガと「フ」は両思いだと思う。	24) ヘルガが黄色いベンチに座ったら本当に収容所行きなのだろうか。ヘルガの誘いを断らなければならぬ「フ」は可哀想。	31) 昔のナチスドイツのことを詳しく知りたい。	37) ヘルガ、「フ」の気持ちをみんなに聞いてみたい。父親、「ぼく」のことも知りたい。これから二人はどうなるのか。

4) 収容所はどれだけひどい所か、ユダヤ人といること、外出時間を破るとどんな刑が待っているのか。	1 1) ベンチにまで差別する理由。ヘルガは差別に反対している。差別のために会えない二人がかわいそう。	1 8) ヘルガが複雑な気持ちではなかったか。二人は文通等で連絡できなかったのだろうか。なぜユダヤ人を差別したか。	2 5) 収容所行きになったら、どんなことをされるのか。知りたい。	3 2) ベンチに座ることも差別されているのはやりすぎ。黄色のベンチに座ることはどういう意味なのだろうか。	3 8) ナチスドイツが、なぜユダヤ人を差別したのかが分からない。
5) ユダヤ人が差別される理由と収容所のことを知りたい。フリードリヒとヘルガの関係が分かるのでは。	1 2) 座ってはいけないベンチに座る気持ち。ヘルガは森で待っていたのか。戦争、差別のこと、物語のその後を知りたい	1 9) この話の中でベンチに座ることはなにを意味するのだろうか。この話の最後はどうなるのか。	2 6) フリードリヒはヘルガが好き。でもヘルガはどうなるのか。ユダヤ人をなぜ差別するのか。	3 3) ユダヤ人の黄色のベンチ、ドイツ人の緑であると決められている差別はどういうことなのだろうか。	3 9) ヘルガはどういう気持ちで、フリードリヒがそわそわしているのを見ていたか。ユダヤ人とドイツ人はなぜ一緒に歩けなかったか。
6) 独がユダヤ人を差別を肯定したのか。ヘルガは正常なのだと思う。ヘルガの気持ちを考えたい。	1 3) 公園まで差別する理由、ユダヤ人の物の販売禁止など差別について知りたい。	2 0) どうしてユダヤ人を差別するのだろうか。ヘルガはどうしてフリードリヒと一緒にいたのか。	2 7) ドイツ人はユダヤ人を弾圧しないで、仲良くできなかったのだろうか。	3 4) ヘルガはフリードリヒと一緒にいることをどう思っているのだろうか。ヘルガはユダヤ人のことをどう思っているのか。	4 0) ユダヤ人をなぜこんなに差別するのか。「きみ」はフリードリヒとどう関係か。

### 2. 3. 生徒の読みについて

生徒はヘルガとフリードリヒの置かれている状況を、資料などを読みながら想像した。フリードリヒは緑のベンチにヘルガと一緒に座ることができない。「緑のベンチ」はフリードリヒにとって「ただもうおそろしい」ものである。もし一緒に座っているところを、フリードリヒがユダヤ人であることを知っている者に見られたとしたら、フリードリヒもヘルガも「収容所」に送られてしまう。しかし、フリードリヒが緑のベンチに座れないことがヘルガに理解されるということは、ヘルガを失ってしまうことを意味する。フリードリヒは緑のベンチの前に苦しむのである。黄色いベンチに二人で座っても、二人のことを知っている者が現れれば同じ結果が待っている。生徒の発言や書いたものから、ここまでの状況や二人の心理は想像が可能であった。

問題は、次の点である。フリードリヒがユダヤ人であることがヘルガに分かるとなぜ二人の関係が壊れてしまうのだろうか。「ユダヤ人イコール差別される者」という図式が中学1年生に当たり前のように認識されてしま

っては、私は「おかしい」と思っている。「なぜユダヤ人、ユダヤ民族が差別されたのか」「差別の上で、互いにひかれ合っているフリードリヒとヘルガが別れ別れにならなければいけない矛盾」それらをこのお話の感想として持って欲しいと思っていた。

また、最後に「森へ行きましょう」というヘルガの誘いに対して、自分たちの置かれている状況を考えるとともヘルガの誘いを受けることのできないフリードリヒの気持ちや、勇敢にも自分の意志を貫こうとするヘルガの人物像に触れている生徒もいた。

ヘルガはどんな人物なのだろうかという問いに対しては「ヘルガは「優しい」とか「心が広い」とかではなくて、フリードリヒが好きで、その気持ちに正直になるために、「森で会う」ことを考えたのだ。><勇気があり優しい。フリードリヒに好意を持っている。差別をしない。心が広い。自分の意思があり、人に左右されない。正しいことをやる人。>といったことがあげられた。「優しい」というよりは「強い」心を持っているのだ、というように「強さ・正しさ」に憧れを抱く生徒も多かった。以下は生徒が書いた感想の一部である。

フリードリヒは、きっと本当は森に行きたくて、行きたくて、仕方ないのだけれど、狂わしいほど悩んだにちがいない。自分はそのままでいいけれど、そんなような状態があるので、フリードリヒの気持ちがよく分かる。

ヘルガはフリードリヒがユダヤ人だとわかって、フリードリヒが悲しまないようにふるまっている。フリードリヒはヘルガのことがとても好きだから、ヘルガにユダヤ人であることが知られてとてもショックだったと思う。でも、お互いに二人が思いやっているのは同じだと思う。

ユダヤ人の自分にも、普通の人と同じようにふるまってくれるヘルガの優しさを素直に受け止められないフリードリヒをかわいそうに思う。また、ヘルガが大切だからこそ一緒にいられないフリードリヒをかわいそうに思う。

僕はフリードリヒは、ヘルガに気を使っているつもりでも、ヘルガにとっては、悪く言えば、余計なお世話だと思う。逆にヘルガに気を使わせていると思う。確かに、フリードリヒはヘルガがいっしょにいるところを見られたら収容所行きだけれども、ヘルガの気持ちとしては普通に付き合っただけかと思う。

私はフリードリヒの気持ちがよく分かるような気がします。フリードリヒはヘルガのことを思い、郊外の森へ行かなかった……。そんなフリードリヒは人を思いやり、そしてやさしい人柄だと思います。私も「フリードリヒ」そして「ヘルガ」のような人になりたい……。

フリードリヒは本当はヘルガと森に行きたかったのに自分がユダヤ人であるがためにそのことを断念しなければならないので、私はとてもかわいそうだと思う。もし自分がその立場に置かれたらやりきれない気持ちでいっぱいだと思う。

フリードリヒは、最後に森に行かなくて、最初はひどいと思った。だが、後の方で、収容所行きということを知って、フリードリヒは人のために、自分をがまんするやさしい人だと思った。

町の公園と違って森には、黄色いベンチもないし、行けばよかったと思う。森の中に入れば、人もいないだろうし、落ち着いて話ができただのではないか。でも、森でヘルガと会うと次の時も会わないといけなく、そのときに見つかったら……。なので、会わなくてよかったような、いけなかったような。どちらともいえない。

フリードリヒは、ヘルガのことを本当によく考えたから、日曜日に行かなかったのだと思う。ただ自己中心的にヘルガと会いたいと言うだけで、出かけるのはヘルガがかわいそう。でも、ヘルガがさそったのだから会ってもよかったのかもしれない。でも、フリードリヒと会ったことで収容所に行ってしまったら、大変だから、フリードリヒはよかったと思う。

フリードリヒもヘルガも相手を思いやる気持ちがあると思う。ヘルガは人種差別をせず、とてもえらい。フリードリヒとヘルガの性格が少しかみ合わなかったかもしれないけれど、二人の性格があってこそ二人だと思う。

ヘルガは強い心を持っている。見た目にとらわれない。相手の気持ちを分かってあげている。ヘルガは優しいだけではなくて、勇気もあるし、なにより人の気持ちを分かってあげているのがすごいと思う。フリードリヒがこの話をしているときにヘルガは何をしているのだろうか。

とにかく、フリードリヒとヘルガ二人ともとてもかわいそうだと思う。休みに一緒に出かけたり、いい感じだったのに人種が違うだけで堂々と一緒に入れない。最終的に森にも行けなかった。またヘルガを収容所に行かせないように思いやるフリードリヒは優しい人だと思う。もうこんな時代が来なければいいと思った。

ヘルガは本当に勇気のある人。私としては、最初、ヘルガってフリードリヒのこと本当に好きなのかな？と思ったけれど、最後の方では好きなんだということが分かりました。ヘルガは心が広いとかいうのではなくて、差別が嫌いで、自分のところに正直に生きているのだと思いました。

## 2. 4. 研究の考察

文学教育偏重に対する批判や、国語の時数減の現実の中で、文学教育はいかにあるべきかは授業実践者にとって大きな課題である。「一つの文学作品をじっくり読み味わわせる」というのが、私自身の考えであり、公開研究会に来られた参会者の多くの意見でもあった。今回の研究授業は、ある場面「ベンチをめぐる二人」を中心に取り上げ、登場人物の気持ちの変化の様子を話し合った。黄色いベンチの存在が、二人の楽しい気分を一変させたことを理解させようとしたわけだが、差別の状況、差別の状況や差別の構造がある程度分らないと二人の人物像に踏み込むことは難しい。どの場面に着目させるか、どの言葉に着目させるかによって、何を生徒から引き出すのか、このことを明確にする必要がある。この話の冒頭は、「フリードリヒ」が「ぼく」の前に<不意>に現れ、一方的に話し始めるのだが、「ぼく」と「フリードリヒ」の関係、当時のドイツやヨーロッパの時代状況などを前提にしないとよく分からない部分が多い。そのため、調べ学習や読み広げなどを通して補うことにした。結局、じっくりと読み味わう時間を十分にとれたかという点では問題が残った。しかも、家庭学習に頼った部分も多くなってしまった。また、一人ひとりの生徒の読み十分引き出すことができなかったのは指導者の今後の課題であると思っている。



# ナチの時代のこどもたち

1年組 氏名

## あごころはフリードリヒがいた 岩波書店

教科書で学習する「ベンチ」はこの本の一節です。熱心なヒトラー・ユグントとして少年時代をすごした著者の自伝的な小説と書かれています。ヒトラー政権下のドイツで、人々はしだいに反ユダヤの嵐に巻き込まれていきます。ドイツ少年の目から、ユダヤ人少年フリードリヒの悲劇を克名に描いた作品。(巻末には丁寧な注と、年表がついています。)

ナチス・ドイツによって迫害されたユダヤ人として、多くの人々の記憶に残るのは「アンネ・フランク」でしょう。13歳で隠れ家に住むようになり、2年後に見つかって逮捕され、1944年、アウシュビッツの収容所に移送され、その後別の収容所で、解放のわずか数週間前に亡くなってしまったアンネ。死後、生き延びた父親が隠れ家時代のアンネの日記を公開し、世界的なベストセラーになりました。

## アンネの日記 アンネ・フランク著 文藝春秋

13歳〜15歳という多感な時期を、ユダヤ人ゆえに隠れ家で、息を詰めてくらさなければならなかった少女アンネ。彼女が綴った日記は、50年が過ぎた今も、時代の証人として読み継がれています。

## アンネ・フランク 最後の7ヵ月 徳間書店

アンネが強制収容所に連れ去られ、無くなるまでの七ヶ月間に何が起ったのか?あと数週間生き延びられれば、救い出されたはずだったのに…

## 思い出のアンネ・フランク 文藝春秋

アンネ一家が2年間もの長い間、隠れ家で暮らせたのは、この本著者ミープ・ヒースさんをはじめ、多くの人の命がけの善意があったからこそです。アンネの暮らしを外から綴った一冊

## 少女アンネーその足跡 借成社

こちらはアンネを直接知っている人たち42人に直接連絡をとり、生々しい証言をあますことなく伝えた名著。

## アンネ・フランクへの手紙 ポプラ社

アンネの死後50年を記念して、もし今アンネの隠れ家へ手紙を送るとしたら何を綴りますかと小中学生に呼びかけ、1冊の本ができあがりました。

## アンネ・フランク 隠れ家を守った人たち

この本は、平和のために今も精力的に執筆活動を続けている早乙女勝元氏が、現地を訪れ、アンネの関係者の人たちと話をし、作られた1冊です。隠れ家の詳細なイラストや写真もあります。

## 写真物語 アンネ・フランク 平和のアトリエ

これはアンネ・フランク財団が、アンネの生い立ちからその後までを写真で構成しながら、アンネの生きた時代を伝えようとしています。

この他にアンネ関係の本としては

- ◆ 悲劇の少女アンネ 借成社
- ◆ アンネとヨーピー 文芸春秋
- ◆ アンネ・フランクの記憶 角川
- ◆ 「アンネの日記」を読む 新日本出版
- ◆ もうひとつの「アンネの日記」
- ◆ アンネと会った旅

ヒトラー率いるナチスによる弾圧は、多くのユダヤ人を苦しめました。その暗黒の歴史を後世に伝えることによって、二度とこのような過ちを犯していけない…そういう意図で様々な本が出版されています。また、戦争はけっして過去のものではありません。

## アウシュビッツ 早乙女勝元編 車の出版

アウシュビッツのガス室で、いったい何があったのか?その真実に迫る一冊です。でも、早乙女氏は言います、これはアウシュビッツのほんの一部でしかない…

## アウシュビッツの手紙 平和のアトリエ

戦争当時、アウシュビッツで行われていたことは、一般の人々には伝えられませんでした。証拠となる写真を撮ることは、ドイツ兵ですら許

されなかったそうです。この写真集は、たった二人の選ばれたナチス親衛隊が写した物です。それだけに見るのがつらいです。

## アウシュビッツの子どもたち グリベース出版

アウシュビッツはユダヤ人を選別する場所でした。働ける者と働けない者に。高さ120CMの棒をくぐられ、ぶつかっただけは左に行き、ムチや棒でたたかれながら毎日12時間働かされました。棒をくぐり抜けた子どもは右に行き、二度と帰ってきませんでした。この本は今の私たちにも鋭い問いかけをしています。

## 子どもたちは泣いたか ナチズムと戦争 大月書店

ガス室に送られることなく、別の場所に連れて行かれた子どもたちがいました。彼らはナチによる人体実験を受けさせられるのです。そして、その証拠を消すために…

## コミック版 ホロコースト 心交社

大虐殺はナチスとユダヤ人の間に起こった過去のことではない。ホロコーストの戦歴的な意味をあかす入門書

## 地獄をみた少年 スパンヤード 岩波書店

ナチドイツ占領下のオランダで、16歳のアメリカ国籍の少年バリーは、遂に捕らわれの身となり強制収容所送りとなる。そこでの汚辱と死、残虐と狂気。辛くも捕虜交換用の外国人として米国へ脱出できたバリー少年の記録。

## 15000人のアンネ・フランク 偕書房

アウシュビッツで殺されたのは大人だけではない。たくさん幼い生命が容赦なく奪われ、才能も花開く前に消された。チェコスロバキアのテレジン収容所で絵を描き、詩を書いていた15000人の子どもたちも…。収容所に残された4000枚の絵に深い衝撃をうけた著者が日本で展覧会を開き、そしてこの本を出しました。

その他に

- ◆ 写真ドキュメント アウシュビッツ収容所
  - ◆ アウシュビッツからの手紙
- ナチスの時代をえがいた作品も多数出版されています。中学生にも読めるものとしていくつか紹介します。作品のなかには、収容所で深い心の傷をうけた人々が、その後の人生をどう生きたか、という重い問題も投げかけています。

## マウスⅠ、Ⅱ アウシュビッツを生きのびた父親の話

ポーランドでユダヤ人狩りにあい、ホロコーストの時代を生きのびた父親の体験と現在の父親と自分の時代を重ね合わせて描いたアンダーグラウンドコミック。ユダヤ人はネズミ、ポーランド人はブタに、ナチスはネコに、というふうに全部動物に置き換えて、深刻なテーマを扱いながらも時にユーモアを感じさせる。また、作者はけっして父親を美化せず等身大の父親を描こうと努力している。コミックスというメディアが成功し、13カ国でベストセラーとなる。



## トセラーとなる。

わたしは千年生きた 13歳のアウシュビッツ NEK  
13歳の少女エリは、金髪のおさげのおかげで、殺されずにすんだものの、地獄を体験する。およそ1年の収容所での生活は、エリにとって1000年も生きたような気がしたという。著者自らの体験を小説化したもの。

## レナの約束 レナ・グリッセルム 清流出版

アンネがもし、生きのびて、鋭い観察眼でアウシュビッツの生活を語ったとしたら、おそらくこのような本になるのではと、翻訳者があとがきで述べています。レナが極限状態の中でどうやって生き延びようとし、何を心の糧としたか、すぐれたノンフィクションです。

## 壁のむこうの街 ウーリー・オルレブ 借成社

父さんが強制収容所に連れていかれたあと、ぼくはハツカネズミのスノーと暮らしていた。アパートの壁の向こうはポーランド人街で、向いの建物の窓に見える少女の顔顔をながめながらぼくは、いつかその少女とスケートをするのを夢見ていた。ポーランドの魔境で生き抜いた少年の物語

## 壁の向こうから来た男 ウーリー・オルブ 岩波書店

14歳のマレクは下水道を通ってユダヤ人ゲッターに荷物を届ける仕事を手伝うようになった。これをスリル満点の冒険のように思っていたマレクだが、ゲッターのユダヤ人とドイツ軍の戦いにまきこまれ…

## 空のない星 シ・オウスキー 福武書店

1946年、敗戦直後のドイツ。16歳のアンテックと仲間たちは、廃墟の中の食料貯蔵庫を秘密の場所にしていた。ところがある日、その秘密の隠れ家にユダヤ人の少年アビラムが迷い込んできた。ユダヤ人は届け出なくてはならない。でも、届けたら、アビラムはどうなってしまうんだろう…?

## 彼の名はヤン コルシシュノフ 徳間書店

第二次世界大戦末期、17歳の少女、レギーネは、労働者として強制連行されて来ていたポーランド人青年ヤンと出会い、恋に落ちた。だがナチスが「下等人種」としているポーランド人とつきあうことは大罪だった。短い幸せな日々後、二人は逮捕され、引き離されるが…

## ケストナー ナチスに抵抗し続けた作家

「飛ぶ教室」や「ふたりのロッテ」で知られるケストナーはドイツの作家です。彼は多くの知識人たちがドイツを離れ亡命するなかで、ひとりドイツに留まり続け、時代の証人となりました。当時のドイツがどう変わっていったかを知ることができます。

## ゼルマの詩集 ゼルマ・アイジンガー 岩波書店

～強制収容所で死んだユダヤ人少女～  
東欧の美しい街に育った多感な少女ゼルマは、うちつづく戦争とたえざる迫害にさらされながら、生きている希望、愛する人への想いを書きつづった。1942年収容所で18歳の生涯を閉じた彼女の詩集が友人たちの手で奇跡的に救い出され

## ビデオ チャップリンの独裁者

チャープリンが制作・監督・脚本・主演して痛烈にヒトラーの独裁政治を批判した作品。これは、ドイツがポーランドに侵入した1939年にクランクインして、1940年に完成したものです。制作中は絶えず脅迫にさらされ、まさに命をかけて撮った歴史上に残る名作です。

## アドルフに告ぐ全五巻 手塚治虫 文芸春秋

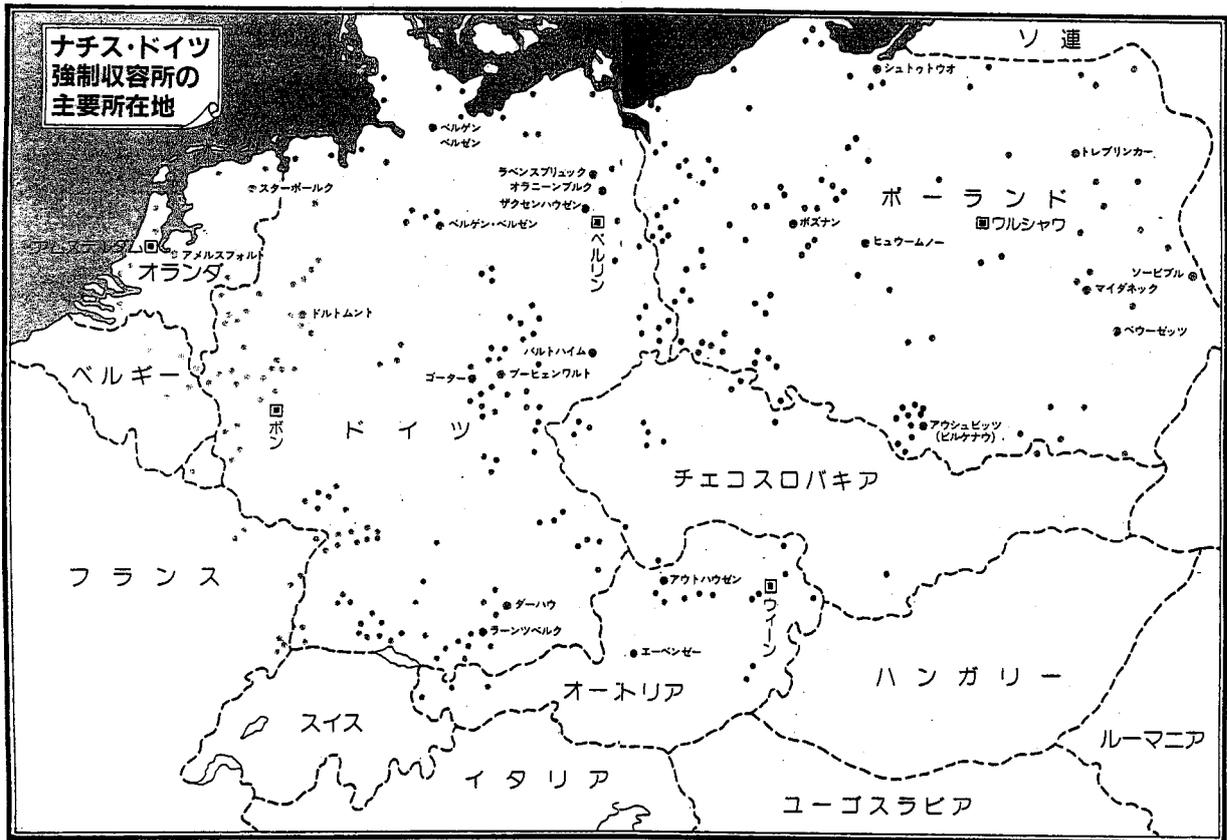
パン屋の息子で日本に住むユダヤ系ドイツ人のアドルフ・カミル。父親や日本のドイツ総領事館員でナチス党員、母親は日本人のアドルフ・カウフマン。そしてアドルフ・ヒトラー。この三人のアドルフの、もつれあった奇妙な一生を描いた作品。



(アドルフに告ぐ)

<資料6> 「ナチス・ドイツ強制収容所の主要所在地」

(『母と子でみる2 アウシュビッツ』早乙女勝元編 草の根出版会 1987年所収)



<資料8> 「ユダヤ人に対する迫害年譜」

(『あのころはフリードリヒがいた』 リヒター作 岩波少年文庫 1977年所収)

- 一九三八年 二月二五日 ユダヤ人は、ポグロムで受けたあらゆる損傷を、直ちに、自己の費用で始末しなければならない。
- ユダヤ人の商店や手工業所の営業停止。
- ユダヤ人の、劇場、映画館、音楽会、展览会への入場禁止。
- ユダヤ人の学童、生徒が全員、ドイツの学校から退校させられる。
- 一九三八年 二月二三日 ユダヤ人経営のあらゆる営業が解体処分される。
- 一九三八年 二月二八日 特定の時間及び特定の域内でのユダヤ人の移動禁止。この命令は発令と同時に発効。
- 一九三八年 二月三日 ユダヤ人の運転免許証及び自動車に関するすべての許可証没収。
- ユダヤ人は、所有する営業所を売却し、また有価証券や宝石類を供出しなければならない。
- 一九三九年 三月二五日 ユダヤ人の大学での修学禁止。
- 一九三九年 三月二五日 ドイツ軍、チェコに進軍。
- 一九三九年 四月二〇日 ユダヤ人に対しては借家人保護法の適用が制限される。
- 一九三九年 五月二七日 ドイツ帝国内にはまだ約二十一万五千八百人のユダヤ人が居住。
- 一九三九年 七月四日 ユダヤ人は(ドイツ帝国ユダヤ人協会)に加入しなければならない。
- 一九三九年 九月一日 第二次世界大戦勃発。
- 一九四〇年 二月六日 ユダヤ人は、夏は二十一時以後、冬は二十時以後、外出禁止。
- 一九四〇年 二月二日 ドイツ在住のユダヤ人の第一回国外強制輸送。
- 一九四〇年 七月二九日 ユダヤ人の、電話の所有禁止。
- 一九四〇年 七月二九日 ユダヤ人は、(無宗教)を名のらねばならない。
- 一九四〇年 七月二二日 (ユダヤ人問題の最終的解決)開始。
- 一九四〇年 九月一日 ユダヤ人は、ユダヤの星を胸につけなければならない。また、警察の許可なしに各自の居住区域外にでることを禁止。
- 一九四〇年 十月二四日 一般のユダヤ人の国外輸送開始。
- 一九四〇年 二月二六日 ユダヤ人の、公衆電話の使用禁止。
- 一九四〇年 九月二日 ユダヤ人は、ラジオ受信機を警察に供出しなければならない。
- 一九四〇年 十月二日 オーストリアのユダヤ人をポーランドに強制輸送。
- 一九四〇年 十月二九日 ユダヤ人の弁償金が、十二億五千万ライヒスマルクに高められ、しかも、最終納付期限が一九三九年十一月二五日と定められる。
- 一九四〇年 十一月二三日 ポーランドにおいて、ユダヤ人は(ユダヤ人の星)のマークをつけなければならないという制度実施。